

のポリティクス（異質で多様な他者との共存）という相克する課題を同時に追求すべきこと、そのために教育関係を組み替えねばならないことを提示していた。したがって、著者にとってシティズンシップ教育は、アイデンティティ・ポリティクスと複数性のポリティクスとが、構想され実践される場面にほかならない。

とはいえ、本書はシティズンシップ教育それ自体を対象とした研究書ではない。本書の構成は次のようになっている。

プロローグ——今、なぜシティズンシップか、第1講 教師に哲学は必要か、第2講 プラトンの絶望と「総合的な学習の時間」、第3講 ソクラテスのセンス、第4講 啓蒙的理性と教師像、第5講 シニシズムという問題、第6講 啓蒙の別の顔、第7講 ルソーと近代教育、第8講 国民教育と市民、第9講 近代的個人の形成と再編、第10講 マルクス主義の逆説、第11講 児童の世紀とユートピア主義、第12講 過去と未来の間に立つ、エピローグ——シティズンシップの再政治化にむけて

ここからわかるように、本書の主要な対象は古典古代から現代までの教育思想である。19世紀後半に成立した公教育制度は、いまや機能不

全に陥っている感がある。日本でも臨時教育審議会答申を契機に教育改革が20年以上も続けられているが、教育の混迷は深刻化するばかりである。著者はこうした教育の危機の原因を近代教育思想のうちに探ろうとする。近代教育思想が公教育制度を成立させ、同時に教育学に正当化根拠を与えてきたことは広く知られている。著者は、近代教育思想を読み直すことによって、その啓蒙主義と進歩主義とを克服する新しい公教育思想の構築を試みている。これが「シティズンシップの教育思想」である。

「シティズンシップの教育思想」は、未だ体系化されるには至っていない。しかし本書に示されたその方向性——シティズンシップの再政治化、批評空間としての学校、過去と未来の間（ハンナ・アレント）に立つ教師像——は、これからの学校や教師のあり方を考えるうえで示唆に富む。

なお、本書の大半は月刊『教職課程』誌に連載された「教師をめざす人の哲学入門」に加筆修正したものである。とかく難解になりがちな近代思想批判を平易な言葉で論じた点でも特筆に値する。

西田正規・北村光二・山極寿一編

『人間性の起源と進化』（昭和堂、2003年9月、2400円＋税）

●—————堀川 哲

本書は人類学あるいは霊長類学を専攻する4名の研究者たちによる論文集である。テーマは書名の示す通りであるが、本格的な内容を持ち、場合によっては霊長類学の知識だけではなく、レヴィ＝ストロース的な構造主義人類学、さらにはメルロー＝ポンティ的な現象学やルーマンの社会学の知識も要求される。その点で読み応えのある研究書である。

私たち人間もまた一定の行動パターンを示す。個人差はあるが、しかし、大枠的には私た

ち人間の示す行動パターンは共通のものである。その共通性が、私たちを「同じ種」のメンバーとするのである。人間は自由だ、といった言い方で生物学的な思想を批判していると思っ

ているひとは、何か勘違いしているのである（なお念のため、社会生物学はこの種のテーマではあまり役には立たない。脳は遺伝子に反逆する、とドーキンスが言ったとき、社会生物学は人間学としては破綻している）。

私たち人間という種に固有の行動様式あるい

は世界への反応パターンに関して、その起源を考える場合には霊長類との比較研究が決定的な重要性をもつこと、これは自明である。なんといっても私たちもまたサルとの親戚なのである。そして幸いなことに、霊長類の研究では日本は世界のトップレベルにあり、私たちもまたその成果を容易に利用しうる。

霊長類の研究がこれまで示してきたのは、人間に固有と見られてきた行動様式の多くがサルにもある、という事実である。例えば、同種の仲間を殺すのは人間だけだ、ヒト以外の動物はそんなことをしない、戦っても殺す手前で闘争は止まる、と言われてきたわけだが、これが(希望的な)錯覚であることが示されてきた。ヒトもむやみやたらに殺し合うわけではない。共同体内部の仲間には、それなりの闘争ルールが適用される。これはチンパンジーがやっていることと同じである。あるいは性行為についてはどうか。人間は性交と生殖とを分離する。これがヒト=狂ったサル論の基本である。しかしこれに関しても、私たちは安易な判断をひかえたほうがよさそうである。類人猿とくにボノボは、性交をコミュニケーション行為の一種として使用しているらしいのである。オーガズムについても、サルもまたそれを持っているらしいと言われている。

本書で特に強調されるのは、インセスト・タブーの問題である。当然にもレヴィ=ストロー

スの理論が問題とされる。レヴィ=ストローはインセスト・タブーを自然に対する文化の介入と理解し、ここに人間社会の成立根拠をみた。それは贈与と交換の理論の中に統合される文化現象である。しかし近年の霊長類学によれば、インセスト・タブーはサルにおいてすでに成立している。サルたちはインセスト回避の様々な様式を持っているということである。詳細は本書を見られたいが、レヴィ=ストロー的な解釈は無効である、というのが本書の著者たちに共通する立場であり、インセスト・タブーの問題からさらにレヴィ=ストローの贈与論も批判される。

分子生物学がチンパンジーとヒトとの距離を一挙につめたのと同じように、霊長類学の進化はヒトと霊長類との距離をさらにつめていくはずである。しかしこの距離がつかまっていても、私たちにはしかし、ある1点だけは、人間に固有の不思議な行動現象として残るのである。私たちもまた動物と同じように生殖機械であるのかもしれないが、しかし私たちだけはそのことを恥ずかしいことと感じているようなのである。人間は「裸のサル」であるかもしれないが、そのことを羞恥の感情で意識しているのだ。これだけは、世界最高水準の霊長類学をもってしても説明できない現象であるようである。この点では私たちは、今なおサルトルやバタイユの哲学を必要とするようである。